



編集・発行：京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
住所：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
URL：http://www.shigafu.cseas.kyoto-u.ac.jp

守山フィールドステーション

野洲川と生きる－青竹の配水管による水利用－ 京都大学地域研究統合情報センター研究員 藤井美穂

滋賀県守山市は近江盆地の南に位置し、琵琶湖に面している。滋賀県最大の野洲川が同市の東部を流れている。かつて野洲川は川幅が狭く、下流部では河床が周辺の地盤より高い天井川であり、守山で南北に分流していた。下流域では、台風や雨が降ると堤防が決壊して度々洪水にみまわれた。流域の人びとは野洲川を「暴れ太郎」と呼び、水害に苦しんできた。

1953年9月の台風13号による大災害を契機に、流域住民が野洲川改修の請願を滋賀県に行ったことを発端とし、建設省により1971年に改修工事が開始され1979年に完成した。河川改修により、これまで南北に分流していた川は廃止され、分流の分岐点から新しい河川が琵琶湖に注ぐようになった。ついに流域の洪水は1953年の台風が最後となった。



旧野洲川南流の堤防。掘削されて、家屋より低くなった。

「川（旧野洲川南流、以下南流と記す）がなくなり、心配がなくなってうれしい」。北野長和（ひさかず）（65歳）さんは、母親（88歳）の口癖だという。北野さんは南流沿いに位置する守山市洲本町開発（かいほつ）で生まれ育った。2008年10月から北野さんからこの集落の暮らしについて話をうかがっている。台風13号の際、南流の堤防が決壊し、開発は洪水の被害にみまわれた。屋根まで水に浸かった家屋があった。開発の人びとは、神社に灯明を供え

なかった年に大きな災害を被ったとして、その後、神社の灯明は欠かすことがないという。野洲川は「暴れ川」であるが他方、人びとはこの川を多様に活用してきた。ここでは、開発集落における水利用についてのべたい。

かつて開発の周辺の堤防にはウサギ、タヌキ、キツネが生息できるほど松林や竹藪がうっそうとしていた。この集落では堤防の竹と松を利用して配水管を作り、堤防下の湧水を溜めた親池から百メートルほど離れた各家に配水していた。この湧水はおいしく、まるやかなお茶が飲めたという。竹の管は松の木の四角いジョイントでつながれ、洪水によって流されないように地下に埋められた。近隣の約10戸がひと組になり、この竹の管からさらに支線をだして各家の井戸に給水していた。配水管には青竹だけを用い20年に一度、竹の管は取り替えられた。竹や松の伐採から竹の配水管の設置、修理は組の人びとが総出で行った。1960年代、集落に上水道が設置されたため、竹の管による配水がなくなった。

開発における竹の管による配水は「暴れ川」と長い間付き合ってきた人びとの知恵だといえよう。さらにその知恵を実現する行動力と住民同士の団結が配水を成功させた。現在、すでに野洲川は「暴れ川」でなくなった。開発の集落では人びとの知恵がいかに継承されてきたのか、今、どのような知恵が芽生えようとしているのかを考えていきたい。



旧野洲川南流。公園として利用されている。

朽木フィールドステーション

「くらしの森」の一步 -火入れの前に-

朽木FSS研究員 今北哲也

・ホトラヤマの復元と原野世界の見直し

止んでしまった慣行がたとえば数十年を経て復古する、というのはまずありえない。とりあえず、むら人の記憶に潜り込んでみる。

琵琶湖には118本の川(1級河川)が流れ込んでいるという。1950年代、川を辿り溯れば辺りには煙たなびくクサ屋根集落があらわれ、牛・馬が田畑を耕している。なかでも、湖西(現高島市)の山懐には近山から谷奥のセコ(斜面)にクサ山が広がる。家畜の踏まし肥田になり田を養うホトラヤマ、屋根葺きのクサ刈り場であるカヤダイラ。春、火入れあとに萌え出た芝草(ホトラ)を夏の土用に刈る。季節の風に種を放ち、枯れ立つカヤ。刈り集め、ニュー田が立ちやがて雪。山・牛・田と人が織りなす濃密な四季の情景が顕れる。

2008年12月、湖西・今津町・椋川集落。雪解けの春を待ちホトラヤマの復元を目指す椋川サイトの「造成」が始まった。ホトラヤマの主演はコナラの萌芽。周りにはツツジ、クサボケ、イバラ、キイチゴ、イタドリ、ウド、ゼンマイ、ワラビ、フキ等々、枚挙に暇ないにぎやかな親しい草波があった。まずナラの団栗をポットに埋める。山出し苗が生がるまでに裸地サイトをカヤ草地に。「くらしの森」を遠望できる踊り場=「原野世界」に出会いなおしたい。

・カヤ原造りから

カヤダイラ復元のため、朽木の奥、林道残土を埋めた瘠せ地のカヤをもらい、掘起こしにかかる。2008年師走の暮れも20日。根雪を気にしもって日待ち。うまい。晴れ間までのぞくおだやかな曇り日だ。参加者は、朽木の地元組、宮内と今北。街からの応援、辻さん。夏、余呉の火入れにも参加した人。



重機でカヤ株を掘る。

重機はやかましくカヤを起こし、唐鋏は株を割り、ほぐし、土が振るわれる。

翌21日、掘起こしたカヤを移植するため椋川へ。日の暮れには天候がくずれらしい。”椋川しぐれ”、ちょっと忙しい気分。今日は4人。京都から黒田、鈴木。朽木から宮内、今北。林道工事の残土で埋まり、整地された谷あい斜面にカヤを植える。唐鋏、バチヅルを振り、ガラっぽい土やら石やら起こしもってつい考えてしまう。植えるなんて。ひょっとして気が変になった？日曜日とはいえ、天の皮あくまで厚く、風冷っこい。こんなケシキに在所のバアもジイもひやかに来んやろう。「そないなもんへっつけて、どないするつもりじゃ」って。



根土を振るってカヤ株を小割りする。



カヤ株を植えるための穴を掘る。

鹿にそっぽを向かれ、あちこちに生い茂るカヤ。ただし、この同じカヤ、若い芽立ちの折には鹿も好むらしい。椋川の年配者らと一緒に、カヤ原だったこの斜面に火入れをしたのは3年前の春のこと。火入れ跡のカヤの萌芽は美味しそう。鹿の餌場になってカヤが絶えたのか？いずれにせよ、雪下から「植えカヤ」の新芽が露わになる前、鹿除けネットの構築作業に入る。2月、間伐材(支柱)の段取りがはじまった。

「こりゃええカヤじゃ」。文化財指定に漕ぎ着けた椋川の民家の屋根から職人の声が飛ぶ。ゆくゆく、そんな光景につなげたい。裸地からの出発、カヤダイラ復元。そこへ入るコナラ苗。2011年春、草木が茂れば火入れの舞台。ホトラヤマを実感する手掛かりになるはず。

脚注

- [1] 足元にホトラを敷き、糞尿まみれをふせぐ。厩から掻き出しては積み込み春のカタ雪の田に櫓で散らし、雪解けあとと人の足で踏み込む。牛を介し山と田が有機的につながっている。
- [2] 刈ったカヤをツガイワラ(穂先^{ひろ}どおしを番)で束ねしめ、さらに何把も寄せ立てる。定まった^{ひろ}尋の縄で巻く。大きなトンガリ帽子のニューが在所まわりのあちこちに雪を被って突っ立っている。

亀岡フィールドステーション

保津川筏流しの聞き取りレポート①

亀岡FS研究員 河原林洋

昨年5月より、月1回、亀岡市保津町在住の元筏士である上田潔氏と酒井昭雄氏に聞き取り調査を行ってきた。元筏士はこの地域ではお二人だけとなった。



向って左が酒井昭雄氏、右が上田潔氏。

上田氏は、大正9年4月29日、亀岡市保津町生まれ。16歳より保津川下りの船頭となるが、昭和15年に入営、各地を転戦し、パラオ島で終戦を迎える。帰国後、昭和

23年頃筏士となり、昭和25年頃から船頭と筏士をかけもちし、75歳の定年まで船頭に従事していた。

酒井氏は、昭和2年5月3日、亀岡市保津町生まれ。16歳より祖父の勧めもあり、筏士となる。上田氏同様、昭和25年頃から筏士と船頭のかげもちをし、75歳の定年まで船頭に従事していた。

お二人とも昭和32～33年頃まで、時々、保津峡から筏を流していたそうだ。約半世紀以上、保津川の水運を支えてこられたのである。

今回は、聞き取り調査で明らかになった、昭和20年代前半の筏士の1日を紹介する。

毎朝7:30頃、亀岡駅より列車に乗り、保津峡駅を下車し、作業現場へと向かう。当時、鉄道・トラック輸送の発達とともに保津峡より上流から筏が流れることは少なく、主に保津峡を現場としていた。主な現場は、鵜飼ヶ浜、鷗谷であり、その現場まで駅から徒歩で向かうのである。

主に筏の作業員は4～5名で、木馬^[1]や車（牛に曳かせる）で川べりに運ばれた材木を川に落とす者、材木を太さや長さによって並べ替える者、1連ずつ筏に組む者、組まれた連を1枚^[2]の筏に繋げる者、とそれぞれに役割分担がなされていた。そして、平均12～13連に繋いで1枚の筏^[3]として、保津川を嵯峨まで流していたのである。また、筏は現地の材木屋の「親方」が検分し、送り状を書いていた。

1枚の筏を組み終わるのは、14時頃で、それから筏で嵯峨へ向かうのである。上田氏はこの時「やれやれ」という気持ちになったそうだ。それだけ急斜面、急流での筏組は危険な重労働であったということだろう。

嵯峨まで下ると、筏は筏仲仕^[4]に引き渡し、亀岡に戻るため、嵯峨駅へと向かうのであるが、列車を待っている間、駅前の店で酒を飲んだり、また、帰りが遅い時は、知り合いの嵯峨の嵐山通船の船頭の家泊めてもらうこともあった。

特に冬期は筏の最盛期であり、嵯峨の船頭が筏組の手伝いに来ていた。筏流しに使う竿（ヒノキ材）は長く列車に持ち込めないため、彼らに保津峡の現場まで徒歩で運んでもらうこともあった。また、筏で使った「カン^[5]」などは、帰りに次回の現場を通りかかった際に走行中の列車から落として帰ることもあったそうである。

お二人は「ようこんな仕事しとったなあ～。冬は冷たくて辛かったなあ～」という言葉を繰り返しておっしゃっていた。筏流しは命がけの仕事で、特に冬期は、寒さ厳しい過酷な仕事だったことが伺える聞き取り調査であった。



昨年9月10日、再現された筏6連。この倍の12連の筏を組み、保津峡を下ったのである。そのスケールがおわかりいただけるであろうか？

脚注

- [1]木馬(きんま)…木材を山から運ぶそりみたいなもの。
- [2]筏全体を「枚」とよんでいた。
- [3]全長約50m、1連4m×12連。
- [4]筏を解体し、嵯峨の貯木場まで運ぶ。
- [5]筏を組み時に使う道具。嵐山に到着後、筏を解体する際に筏仲仕が保管しており、次回、嵐山に下ると返してもらう。

催しのご案内

■第9回 定例研究会

1. 日時 : 平成 21 年 2 月 27 日 (金) 16:00-19:00
2. 場所 : 守山 FS (滋賀県守山市梅田町 12-32)
3. 発表者 : 永井邦太郎 (摺墨山菜加工生産組合)

4. 発表内容

「湖北・山里の水と生き物と人のかかわり」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

農山村の将来をどう描くのか？

生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

約 40 年前から既に日本で認識され始めていた農山村の過疎化は、今や大きな社会問題となっている。65 歳以上の人口比が 50%以上となる、いわゆる限界集落は急増し、日本人の衣食住を支えてきた農山村の伝統的生業とその基盤となる生態資源は危機に瀕している。食物自給率がカロリーベースで 40%に満たない日本の生存基盤は、長期的には非常に不安定であり、衰退しつつある第一次産業の見直しが急務といえる。

話は変わるが、私は 8 年程前からミャンマー・バゴ一山地の村落で調査研究を行っている。そこでは、タケの再生をうまく活用した焼畑耕作が営まれ、村人は日常生活に必要なだけの糧を森や川から得て暮らしている。弱者を支える相互扶助の精神も根強く、孤独死するような老人はいない。ここには、現代の日本で失われつつある人と自然、人と人との密接な繋がりが生きている。しかしながら、このような自給的生活を営む村人に経済的な余裕はほとんどなく、村には電気や水道もない。また、病院は村から 40km 以上も離れた町にしかなく、マラリヤなどを患っても治療を受けられる人は少ない。ミャンマーの農山村での生活にある種の憧憬を抱く自分がいるのは確かだが、自身がそこに永住するような覚悟はない。

日本の農山村における伝統的生業の重要性や魅力を訴えることは容易いが、都市部に生活の基盤をもつ外部者が、農山村の魅力のみを訴えても重みや説得力は生まれにくい。農山村の将来像を描くには、まず、そこに生きる当事者たちが何を考え、どのような問題に直面し、何を目指しているかを十分に理解することから始める必要があると思う。

当プロジェクトでは、地元住民、地方自治体、NPO、研究者等が協働しながら、日本の農山村の望ましい将来像を共に構築していくことを目指している。過疎化が進む農山村ではあるが、都会での仕事や人間関係に

疲れ、田舎での生活を指向する人たちも少なからずいる。世界的な金融危機の影響を受け、都市部には仕事や住居を失った人々が溢れかえっている現状を鑑みれば、農山村の重要性はますます高まっていくと思う。それ故、伝統的生業と生態資源が失われてしまう前に、その継承を繋ぐ架け橋となりたいと思うのである。

当プロジェクトの活動は、亀岡・守山・朽木にある 3 つのフィールドステーション (FS) を中心に行われている。亀岡 FS では、筏をシンボルとした流域の人・山・川・町のつながりの再構築を試みており、かつて丹波山地で切り出した材木を京の都へと運んだ保津川の筏流し復活のため、元筏士の方々の指導の下、昨年 9 月に筏を組んで保津川を下った。元筏士達は既に 80 歳を超えており、彼らの知識・経験を継承するために残された時間は長くはない。守山 FS では、外来魚が猛威を振るう琵琶湖で生息数が激減し、食卓にのぼる機会がめっきり減ってしまった琵琶湖の在来魚を用い、地元の漁師の協力の下、ナレズシ漬け込みの体験会を行っている。地元漁師との交流を通じ、近江の伝統的な食文化を学びながら、在来魚を食べること、さらには外来魚を食べることの意味を考えている。朽木 FS では、火入れと共にあったかつての山野の暮らしを再現するため、カヤ株移植によるカヤダイラの復元を試みている。また、奥山の溪流を活用した水力発電システムを構築し、火と水のエネルギーの活用による、伝統的生業と現代の技術を組み合わせた新たな生業基盤の確立を目指している。

都市生活を営み、大学に勤務し、研究を生業とする私に、日本の農山村がかつての活気を取り戻すためにどのような貢献ができるのか、明確な答えはまだない。しかしながら、地域に根ざして力強く生きる人たちと共に汗を流し、議論を交わし、お互いの立場の違いを超えた理解が生まれた先に、その答えがみえてくるのではないかと思う。